

ファンの誇り—清く、正しく、美しく—

川口光

劇場前にずらりと整列し、統制のとれた中で声を揃え、呼びかけをする。独特な雰囲気さえ感じさせる、宝塚ファンの入待ち出待ちの様子だ。多くの女性を魅了し、絢爛華麗な夢の世界へと誘ってきた宝塚歌劇は2014年、100周年を迎えた。

宝塚歌劇団は、女性だけで構成される歌劇団だ。現在は東京と兵庫に主要な劇場を構え、ミュージカルとショーの華やかなステージを繰り広げる。「タカラジェンヌ」と呼ばれる団員としてその舞台を踏むことができるのは、約20倍の難関を突破し、2年間の厳しい宝塚音楽学校を卒業した者のみだ。「清く、正しく、美しく」をモットーとし、厳格な上下関係の存在する宝塚。中でも特徴的なのは「男役」とトップスター制度である。

男役は、女性の描く理想の男性像を体現した形だと、紅潮した顔をほころばせるのは、宝塚ファン歴10年以上だという田畑花子さん(21)だ。男役の凛々しく麗しい姿や、細部まで「理想の男性」を研究しつくした身のこなしと表情は、「男性より男性らしい」とも評される。各組にはそれぞれ男役、娘役のトップスターが存在し、すべて公演の主役はその二人が務める。特に「男役」は、女性の憧れの的だ。対する娘役も、女性より女性らしい。常に男役を引き立て、控えめに。決して自分が男役より前に出ることはない。

「娘役の仕事、歩き方、髪型などを参考にしている。」と話す北山美祐さん(20)は祖母の代から代々宝塚ファンだ。宝塚と共に育ってきたともいえる彼女は、田畑さんと共にお茶の水女子大学のミュージカルサークルMMGで自身も娘役として活躍する。そんな二人は宝塚ファンクラブに所属する大の宝塚ファン。背筋を伸ばし、目を輝かせ、上品な言葉で宝塚を語る彼女たちからは、「宝塚の娘役」を感じる。

華やかで独特な夢の世界には、宝塚の世界を構成する「一部」とも言えるファンの存在が欠かせない。「宝塚は、ファンも清く正しく美しい。」と古川愛さん(20)は話す。ある男性アイドルグループのファンでもあるという彼女は、両者のファンの違いに驚いたと言う。好きなアイドルを目の前にし、黄色い声を上げる、彼を近くで見ようとファンが殺到し大混乱になる。これが今まで彼女が目にしてきた光景だ。ファンとしては目の前に憧れの人がいるのだから、それが普通だろう。しかし、きちんと並び、列を崩さず、押したり触れたりせず、「暗黙の規律」の中でスターを応援するのが宝塚歌劇のファンだ。

憧れのスターに倣うように清く正しく美しく、応援するファン。その原動力は「宝塚ファンとしての誇り」ではないかと田畑さんは思っている。2015年、宝塚歌劇団とファンは、共に新たな101年目を歩みだした。今日も兵庫と東京の劇場では、憧れと、夢、そして「誇り」を胸に、多くのファンが甘美なひとときに浸る。

編集後記

三田キャンパスのライターとして、そして宝塚ファンの一人としてこの記事を書くことができ、嬉しく思います。宝塚の華やかで美しい世界だけでなく、宝塚ファンの紹介もできればよいと思ったのがこのテーマを選んだきっかけでした。宝塚を観劇する際は、是非ファンの方々にも注目してみてください。最後になりましたが、取材を受けてくださった藤門先生、内海さん、平松さん、古川さん、田畑さん北山さん、ご協力いただいた MMG の皆さん、立木さん本当にありがとうございました。